

2011年
12月22日
木曜日

●退任教授最終チャペル講話／井上勝雄 教授（統計学・計量経済学）

如何に働くか

学生諸君の最近の厳しい就活を見聞きしていて、何事か話すべきかと思っていました。そんな折、京セラを立ち上げ、社長・会長を経験して、今は名誉会長を務める稲盛和夫氏の『働き方』（三笠書房）に出会いました。稲盛氏は世の中を見ていて、若い人たちの中には、一生懸命に働いたり、必死になって仕事をしたりするのは格好悪いと考え、株の取引で楽して儲けるスタイルに憧れ、一攫千金を果たして若くしてリタイアするのをゴールだと考える人が増えるように思われたようです。本当は働きたくないが、食べていくにはやむを得ず働く、だから楽に働きたいといった考え方が、豊かな時代環境を背景に、若い世代の人たちに浸透してしまったかに見えていたのです。そこで、稲盛氏は、自らの考えと経験を話しして、働くことの意義

や目的、幸福な人生に繋がる「働き方」を、若い人たちに伝えたいと考えたのが、『働き方』を出版するきっかけになったようです。

稲盛氏は、若いときに多くの挫折を経験しています。まず、中学受験に失敗します。その後、結核に罹患し死線をさまよう経験をし、その病気を押して受験した再度の中学受験にも失敗します。そして、戦災で家まで焼かれてしまいます。志望大学への進学も失敗するなど、不幸は度重なります。やがて地元の大学に入學し、猛勉強に励みます。最終学年になって、大学から太鼓判を頂いていたのですが、大企業への就職活動は、ことごとく失敗して、うまく進路が決まりませんでした。やっつこと、京都の「松風工業」に就職できました。この会社は、もともと

ですが、氏が就職した頃は、オーナー一族の内輪もめや、労働争議が絶えないので、実は、今にも潰れそうな赤字会社になってしまっていました。近くの商店の親父から「えらいところに就職したな、あんな会社に住いたら、嫁もこんで」と言われてしまいます。事実、初任給は、しばらく待ってくれ、と言われる始末です。23才の氏は、「何故、こんなに次々と苦難や不幸が降りかかってくるのだろうか、この先、自分の人生は一体、どうなるのだろうか」と、暗澹たる思いでした。

入社後一年も経たないうちに、同期に入社した者はほとんど辞めて、残ったのは、たった二人でした。しかも、この二人は、会社を辞めるべく自衛隊の幹部候補生試験を受けて、ともに合格したのでした。自衛隊にはいる手続きのために、戸籍抄

本が必要になり、稲盛氏は、実家に戸籍抄本の送付を頼んだのでした。ところが戸籍抄本は待てど暮らせど一向に届きません。後で分かったのですが、「苦勞して大学まで進ませ、先生の紹介で京都の会社にやっとならせてもらったのに、半年も辛抱仕切れないとは、何と情けないやつだ」と、兄が怒って、家族の誰にも、抄本を送らせなかったのです。

稲盛氏ただ一人が、オンボロ会社に残されるまで追い詰められて、やっつと目が覚めるのでした。「会社を辞めるには大義名分のような確かな理由が要るだろう、漠然とした不満から辞めたのでは、これからの人生、きつとうまくいかなくなる」と思い至り、働くことに真正面から本気で格闘してみようと、人生初めて決断をするわけです。

当時、会社は、最先端のファイ

セラミックスの研究をしていました。そこで稲盛氏は、研究室に鍋釜を持ち込み、寝泊まりしながら、四六時中、研究に励み、三度の食事もろくに採らず、実験に打ち込みます。フラインセラムックスに関する

最新の論文が掲載されているアメリカの専門誌を取り寄せ、辞書片手に読み進め、図書館で借りた専門書をひもといたりして、仕事の終わった夜や、会社の休みの日にも勉強と実験を重ねます。そうするうちに、興味深く、また好ましい実験結果が出るようになってくるのです。と同時に、それまで抱いていた「会社を辞めたい、自分の人生はどうなるのか」といった悩みや迷いが消えていったようです。それどころか仕事

が面白いと感じられ、ますます「ど真剣」に働くようになり、周囲から評価をいただけるようになります。ある時、一つの製品を作る過程で、さらさらの粉末状の原料から一定の形に形成するためには、粘りけのある「繋ぎ」が必要になりました。様々工夫するのですが、どうしても不純物が混ざることになって、製造過程はうまく前に進みません。考えあぐねる日々が続く中、実験室を歩いていたところ、何かに蹴躓いて思わず足元を見ます。そうすると、靴

にべつとりとパラフィンワックスが付いていたのです。「誰だ！こんなところにワックスを置いたのは」と叫びそうになったその瞬間、氏は、「これだ！」と「繋ぎ」の解決策がひらめいたのでした。その時、悩み抜いた問題が一気に解決したので「神の啓示」としか例えようのない瞬間だったようです。これが「最初の成功体験」であって、そうして後々の「京セラ発展の礎」になるのです。

不満と愚痴で頭が一杯であった自分の考えを改め、ただ一生懸命働くことに徹したのです。そうすると、不思議なことに、苦難や挫折の方向にしか回転していかなかった人生の歯車が、良い方向へ逆回転し始めたようです。自分に与えられた仕事に、愚直に、真面目に、地道に、誠実に取り組み続けることで、不満や利己的な欲望を抑えることができたのでした。夢中になって仕事に打ち込むことは、怒りを鎮め、愚痴を慎むことを可能にしたのでした。さらに、苦勞しながらも仕事への充実感がわき出てくるのです。日々、そう努めることで、人間性も少しづつ向上させられるようです。天職というものに出会うのではなく、愚直に、真面目に、地道に、誠実に仕事に取

り組む中から、天職を自ら作り出すのだと感じさせたのです。仕事を始めようとすると、好きな仕事を求めるより、与えられた仕事を好きになることから始めよ、と言うわけです。

実は、『働き方』を読みながら、以前、経済学部のチャペルの額に書かれた聖句「艱難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」が思い出されました。学部生だったか大学院生になっていたか、定かではありません。当時、この聖句から、経済学であれ、何らか新しく学び始めるときの学びのルールとして、私は納得していました。最近、ゼミ生に、卒論の取り組み方のルールとして、話しています。卒論のためのものもとても重要な種本を選んだら、まず、その種本を苦勞しながらも熟読しなければなりません。最初は、少々理解しづらいところがあっても、また分からないうところがあっても、とにかく読み進め、早く文献を読み終えたという充実感を味わいます。2回目に読むときには、理解しづらいところ、読み飛ばした箇所など、講義の教科書や、他の文献で補って、3回目くらいには、先生に質問しに行ったり、疑問点を投げかけたりして、細部に渡って、理解を深めます。

さらに4回目、5回目に熟読するうちに、自らは何をプラスして卒論に仕上げられるかというのが、徐々に見えてくるとアドヴァイスしています。これは、私にとっては、論文作成のコツでもあったわけですが。

いずれにしても、この聖句と稲盛氏の『働き方』つまり彼の人生訓には、共通するところがあると感じられます。天分・才能・天職は与えられるのではなく、自ら見つけるのです。その見つけ方は、困難にぶつかり、忍耐強くそれに耐え、工夫をこらし苦勞して、「神の啓示」に出会って、はじめてうまくいくのです。稲盛氏に言わせると、「神の啓示」に出会うまで、忍耐強く苦勞に耐えなければならぬそうです。忍耐強く耐えた苦勞の積み重ねが、充実感に繋がっていく、そして充実感が蓄積されて、期待がもてるようになり、希望が湧いてくるのです。

諸君に、この聖句を実感する恵みが与えられますことを、心から祈念しています。